

AIMS-Gifu利用分析レポート

～授業改善への取り組みに向けて～

岐阜大学教育推進・学生支援機構 学修支援部門
AIMS-Gifu運用ワーキンググループ

目次

1. レポートの背景と目的	2
1.1 AIMS-Gifuの導入目的と利用率	2
1.2 AIMS-Gifuに対する教員と学生の認識の相違	2
1.3 AIMS-Gifu利用分析レポートの目的	2
2. 利用状況の総括的分析と考察	3
2.1 分析対象データの概要	3
2.2 分析結果	3
3. 利用状況の学部別分析と考察	8
3.1 教育学部	8
3.2 地域科学部	10
3.3 医学部(主に看護学科)	12
3.4 工学部	14
3.5 応用生物科学部	17
4. 授業改善への取り組みに向けた方向性	19

AIMS-Gifu活用事例FD意見交換会のご案内

このレポートによるAIMS-Gifu利用状況分析結果に基づき、AIMS-Gifu活用事例FD意見交換会の開催を企画しました。ここでは、教員意識と学生意識の相違について簡単に紹介するとともに、アンケート調査において学生からAIMSを効果的に活用していると回答された各学部の教員からその活用事例を紹介してもらいます。また、この活用事例紹介に基づき、紹介者とコメンテーターを中心としたパネルディスカッションを行い、授業改善への取り組みについて意見を交換します。本レポート末尾にそのプログラムを掲載しますので、是非ご参加下さいますようお願いいたします。

開催日時: 2014年3月10日(月)13:00～14:45

開催場所: 全学共通教育講義棟1C

1. レポートの背景と目的

1.1 AIMS-Gifuの導入目的と利用率

AIMS-Gifu(以下、「AIMS」と略記。)は、e-Learningによる学習支援を担うITシステムとして、2006年9月から導入されました。AIMSの導入は、学生による自学自習の環境を提供することにより、授業時間以外での学習を定着させるとともに、教員とのコミュニケーションを円滑化させ、一人一人の学生の学習意欲および学習効果を高めることが最も大きな目的でした。現在では、半数ほどの教員がAIMSを活用し、9割以上の学生がAIMSに日常的にアクセスするようになっています。しかしながら、これによる学習効果が未だ明確ではないことに加え、AIMSそのものの使いにくさやわかりにくさを指摘する声も少なくありません。

1.2 AIMS-Gifuに対する教員と学生の認識の相違

大学教育委員会の下に、AIMSによる学習効率を高めるための効果的な運用を検討するAIMS-Gifu運用ワーキンググループが設置され、2013年12月からは、教育推進・学生支援機構学修支援部門の中で活動しています。また、教員・学生からの質問に対応するためのAIMSヘルプデスクやAIMSに関する様々な利用促進活動をサポートする学生スタッフが配置されています。こうしたAIMSの運用・利活用促進担当組織では、利用者アンケートや利用ログデータからAIMS活用状況に関する分析を継続的に実施しています。

この数年、成績提出をAIMSから行うことにした学部が増えてきたことやヘルプデスク設置が知られるようになったことなどに伴い、教員による利用率がわずかに上昇してきています。しかし、こうした利用率上昇とともに、AIMS利用による学習効果に関する認識にも変化が現れるようになってきました。後述のように、AIMSを利用する学生の9割ほどが、AIMSが予習・復習などの自宅学習に有効であると考えている反面、AIMSによるこうした効果を実感している教員がAIMS利用教員の半分にも満たなくなっています。また、AIMSの中のどういった機能が学習に効果的であると考えているかについて分析したところ、学生の考えと教員の考えに大きな相違があることもわかってきました。さらに、こうした教員と学生の思いの乖離状況は、学部ごとに少しずつ異なっていることも明らかになっています。

1.3 AIMS-Gifu利用分析レポートの目的

AIMSの利用効果を客観的に定量化するには、AIMS利用有無やAIMS利活用方法による学生の習熟度の違いを分析することが必要になります。しかしながら、全学的にこれを実施することは容易ではなく、現時点では、学習効果に対する学生と教員それぞれの印象を定量的に分析することが次善の策として考えられます。そこで、両者の相違を学部ごとに分析した結果をレポートとしてまとめ、これを全ての教員に配布することにしました。もちろん、学生側が教員の配慮を理解してもらえていないケースも少なからず存在すると思われます。しかし、学生の考えていることを教員が理解することで、学習効果を上げるための方策を検討する一助になることもあると考えられます。このレポートは、AIMS利用に関する現在の教員と学生の意識の違いを考えていただくきっかけにすることを目的としています。

2. 利用状況の総括的分析と考察

2.1 分析対象データの概要

一般的なITシステムと同様に、AIMSでも、利用者のログインデータが蓄積されています。そこで、AIMSのシステム更新が行われた2012年4月以降のログインデータを用いて、常勤教員を対象としたログイン回数を半期ごとに集計しました。これにより得られる半期ごとのログイン回数を分析した結果が、

分析1: 学期ごとの教員のAIMSログイン回数

です。一方、AIMSが導入された2006年度後期以降、毎学期末に学生・教員を対象とした利用者アンケートが実施されてきています。そこで、アンケート設問内容がほぼ同じと考えられる2011年度後期から2013年度前期までの4学期分のアンケート結果を分析対象とすることにしました。各学期のアンケート回答者数を表-1に示します。これらのアンケートでは様々な設問が設けられていますが、このレポートでは、学生と教員のそれぞれについて、AIMS利用による学習効果や意識を明らかにすることを目的とするため、次の3種類の分析を行いました。

分析2: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)

分析3: AIMSが効果的と感じた事項

分析4: 役立ったと感じたAIMSの機能

表-1: アンケート回答者数

		全体	教育学部	地域科学部	医学部	工学部	応用生物科学部
2011年後期	学生	429	116	23	32	147	88
	教員	69	24	5	11	19	6
2012年前期	学生	1355	283	74	80	557	242
	教員	56	10	2	7	25	9
2012年後期	学生	821	232	56	54	268	140
	教員	67	13	4	5	29	13
2013年前期	学生	796	142	57	79	300	159
	教員	73	15	4	5	29	18

2.2 分析結果

ここでは、分析1～4について、全ての学部に関する結果を総括的に考察します。なお、学部ごとの考察については、後述の「3. 利用状況の学部別分析と考察」において示します。

分析1: 学期ごとの教員のAIMSログイン回数

図-1は、2012年度前期～2013年度前期の3学期について、学期ごとの教員のログイン回数を常勤教員数に対する割合として示したものです。全体としては、AIMSを全く利用していないログイン回数0回や成績提出などの極めて限定された目的でAIMSを利用していると考えられるログイン回数1回の割合が次第に減少し、徐々にログイン回数が増えている傾向が現れています。AIMSを介した成績提出の促進が進められていることが、原因していると考えられます。一方、半期のログイン回数11～20回や21～50回という平均して毎週数回はAIMSにアクセスしているケースも増えており、定期的な利用が伸びていると判断できます。アンケートに回答していただいた教員の意識

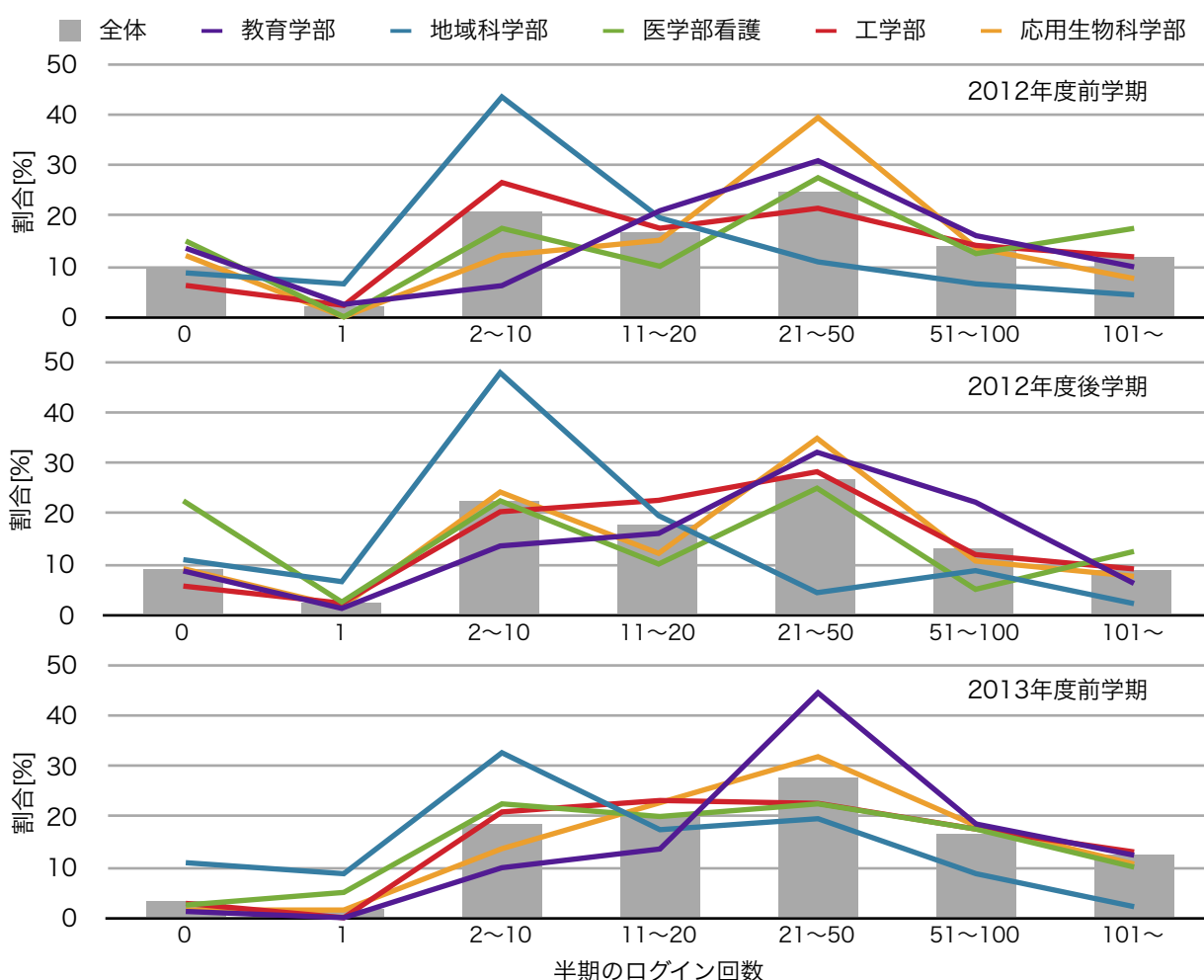


図-1: 学期ごとの教員のAIMSログイン数

が高まってきている顕れと考えられるものの、意識向上の具体的な原因は各学部によって異なるため、全学としての原因を明確にすることはできません。

分析2: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)

図-2は、2011年度後期～2013年度前期の4学期(2年間)について、学習・授業においてAIMSが役立ったかどうかに関するアンケート回答割合を学生と教員のそれぞれについて示したものです。

「大いに役立った」と「役立った」というAIMSの効果に関する肯定的回答は、学生全体では8割弱であるのに対し、教員全体では8割を超えており、学生よりも教員の満足度がわずかに高い傾向を示しています。

肯定的な回答の割合を満足度と見なし、学生と教員の相関を学期ごと・学部ごとに示したものが図-3です。全体としては、学生の満足度と教員の満足度には高い相関関係が認められますが、学部による偏りも顕著となっています。こうした偏りの原因を学部ごとに明らかにすることが大切と考えられます。

分析3: AIMSが効果的と感じた事項

図-4は、2011年度後期～2013年度前期の4学期(2年間)について、AIMSが効果的と感じた事項に関する選択割合を学生と教員のそれぞれについて示したものです。全体としては、「予習・復習

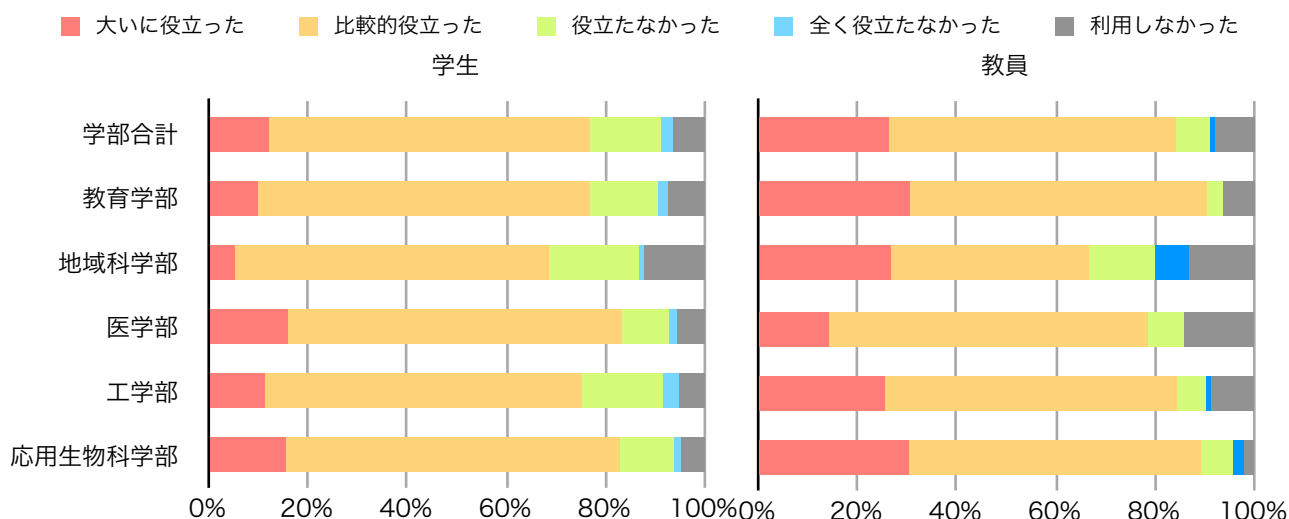


図-2: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)

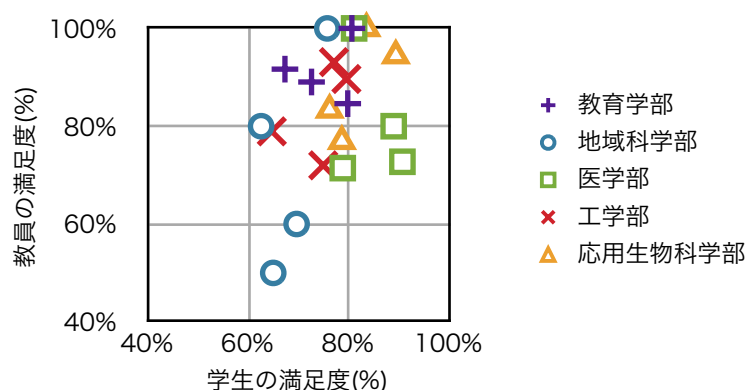


図-3: 学生・教員間の満足度の相関

等」, 「授業目標・方法の理解」および「課題遂行状況の把握」において, 学生・教員ともに効果を感じている割合が高くなっています。

こうしたAIMSが効果的と感じた事項に関する学生の回答割合と教員の回答割合との相関関係において, 特徴的な傾向を示す「予習・復習等」, 「授業目標・方法の理解」, 「課題遂行状況把握」および「学びの省察」について, 図-5に示します。図-4において効果を感じているとの回答が多かった3つの事項の中でも, 「予習・復習等」と「授業目標・方法の理解」については, 学部ごとのばらつきが大きく, 各学部でのAIMS利用状況の違いが顕れていると考えられます。一方, 「課題遂行状況の把握」については, 両者の相関が比較的高く, しかも, 教員よりも学生の方がその効果を実感している傾向が高くなっています。図-4での回答割合がそれほど高くない「学びの省察」については, 学生よりも教員の方がその効果を感じているようです。

分析4: 役立ったと感じたAIMSの機能

図-6は, 図-4と同様に, 2011年度後期~2013年度前期の4学期(2年間)について, AIMSにおいて役立ったと感じた機能に関する選択割合を学生と教員のそれぞれについて示したものです。全体としては, 「講義資料の配付」, 「課題提出」, 「掲示板」, 「連絡事項」, 「成績表」および「Eメール」において, 学生・教員ともに効果を感じている割合が高くなっています。また, 学生と教員の回答状況について, 図-5と同様に特徴的な相関関係を図-7に示します。「講義資料の

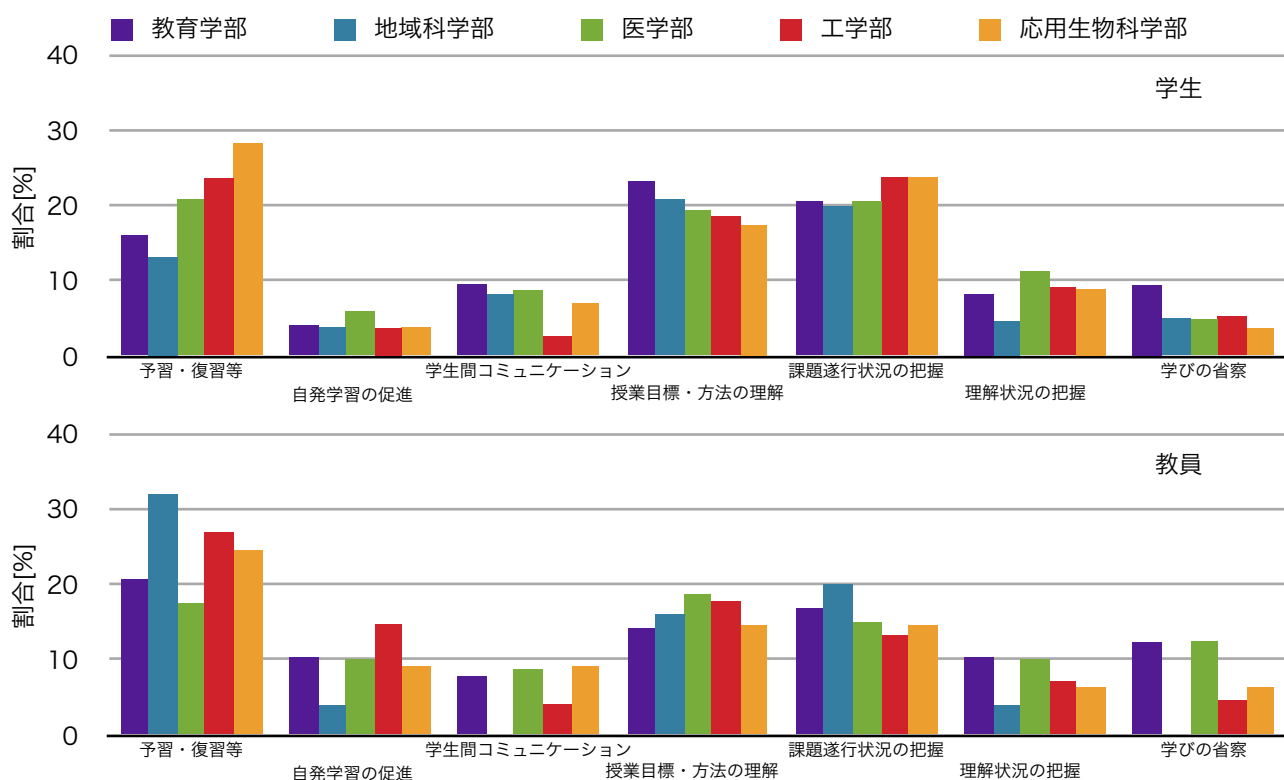


図-4: AIMSが効果的と感じた事項

配付」については、学生・教員ともに役立っていると感じています。「課題提出」，「テスト」および「成績表」では、教員よりも学生の回答率が全体的に高く、学生が自ら授業の習熟度や取り組み状況を確認することに有用と感じていると伺えます。逆に、「連絡事項」と「Eメール」については、学生よりも教員の回答率が高く、連絡手段としてAIMSを活用している教員が多いことが現れています。また、「掲示板」を役立ったと感じている教員の割合に比べて、学生の割合は低く、掲示板の活用方法を検討する必要性がありそうです。

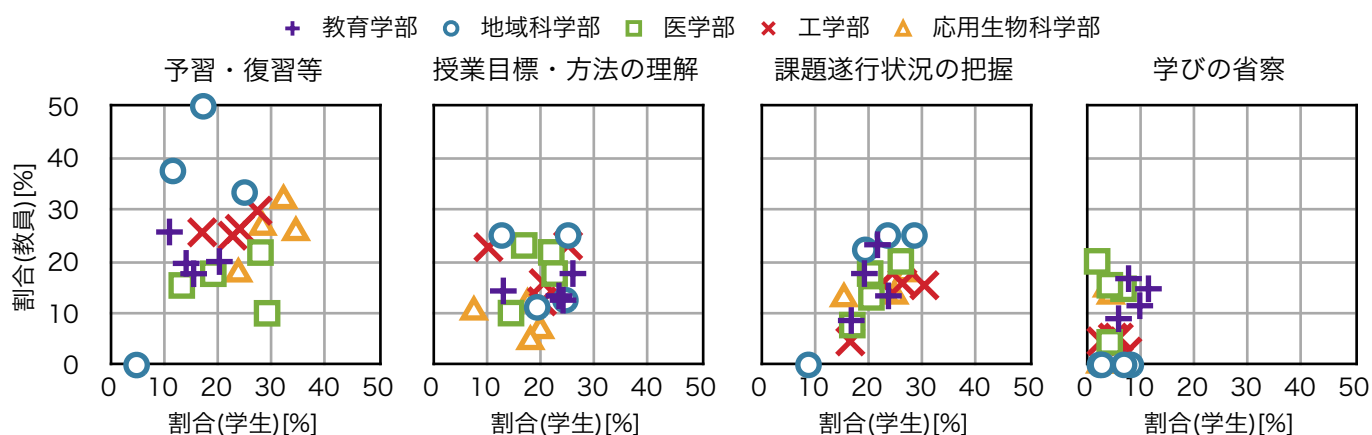


図-5: 学生・教員間のAIMSが効果的と感じた事項の相関

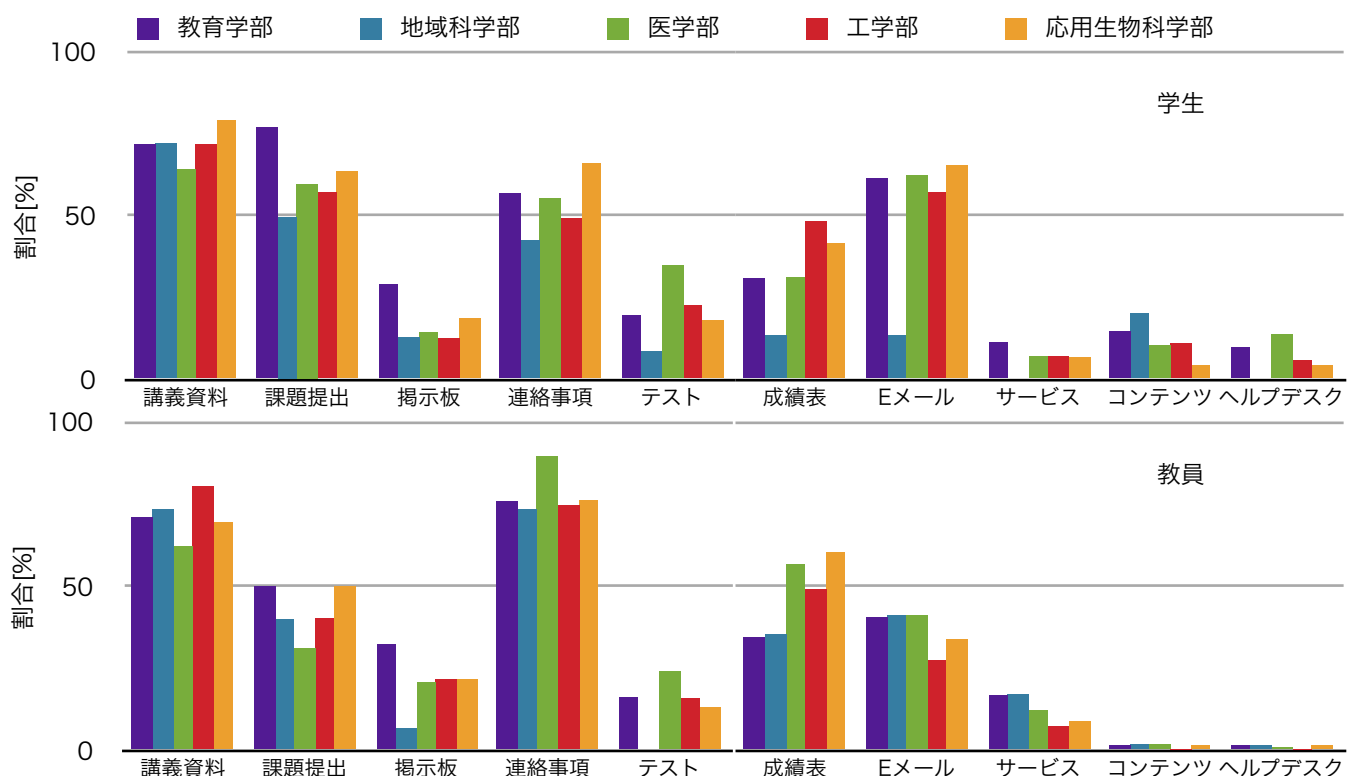


図-6: 役立つと感じたAIMSの機能

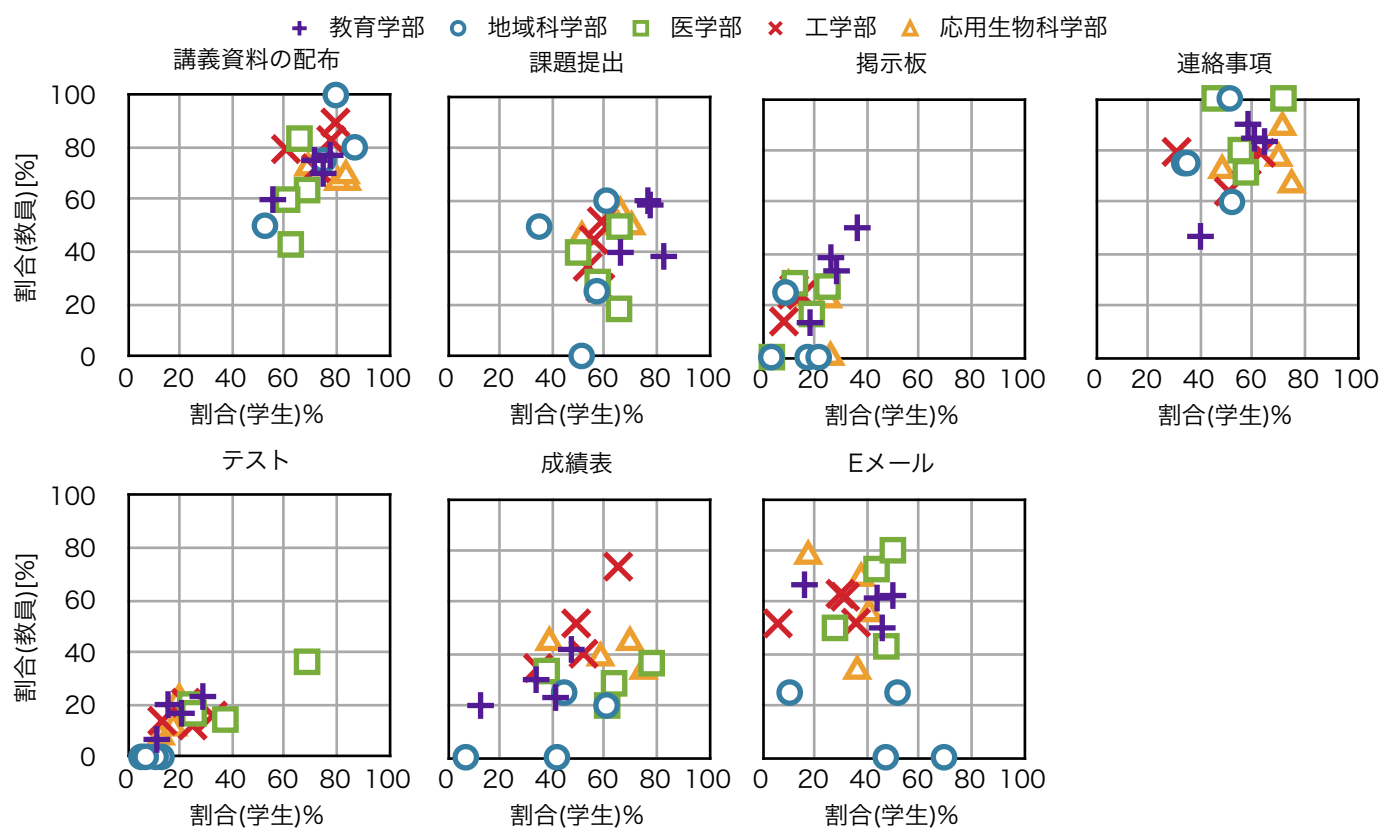


図-7: 学生・教員間の役立つと感じたAIMSの機能の相関

3. 利用状況の学部別分析と考察

3.1 教育学部

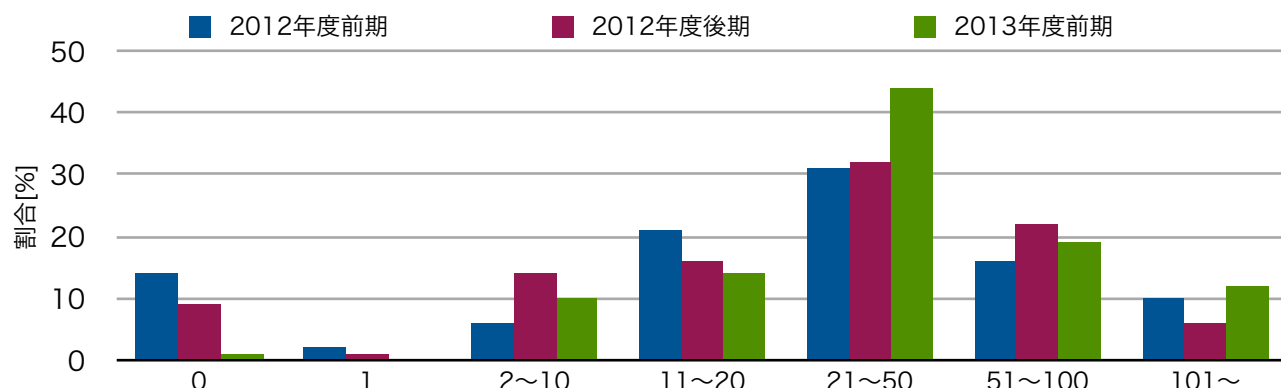


図-8: 学期ごとの教員のAIMSログイン数(教育学部)

分析1: 学期ごとの教員のAIMSログイン回数

図-8に示すように、教育学部では、ログイン21回以上、平均して週に数回～毎日AIMSにアクセスしている教員の割合が2012年度前期より徐々に増えており、2013年度前期には75%でした。この結果より、大部分の教員がAIMSを恒常的に利用しているといえます。その内、ログイン回数が50回以上、ほぼ毎日AIMSにアクセスしている教員の割合は30%前後と2012年度前期より変化しておらず、これらの教員にとってはAIMSが教育ツールとして定着していると考えられます。また、教育学部では2013年度前期よりAIMSを使って成績を提出することになったため、それ以前はおおよそ1割の未アクセスの教員がいましたが、2013年度前期にはほぼ0となりました。

分析2: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)

図-9に示すように、教育学部では、学生よりも教員のほうがAIMSの満足度が高いという結果となりました。各学期における回答を見てみると、教員の場合、後期より前期のほうが役立ったと回答した割合が高くなりました。これは、前期の開講科目においてAIMSを活用する教員が多かったことを示唆しています。一方、学生には教員のように、前後期に偏った傾向は見られませんでした。

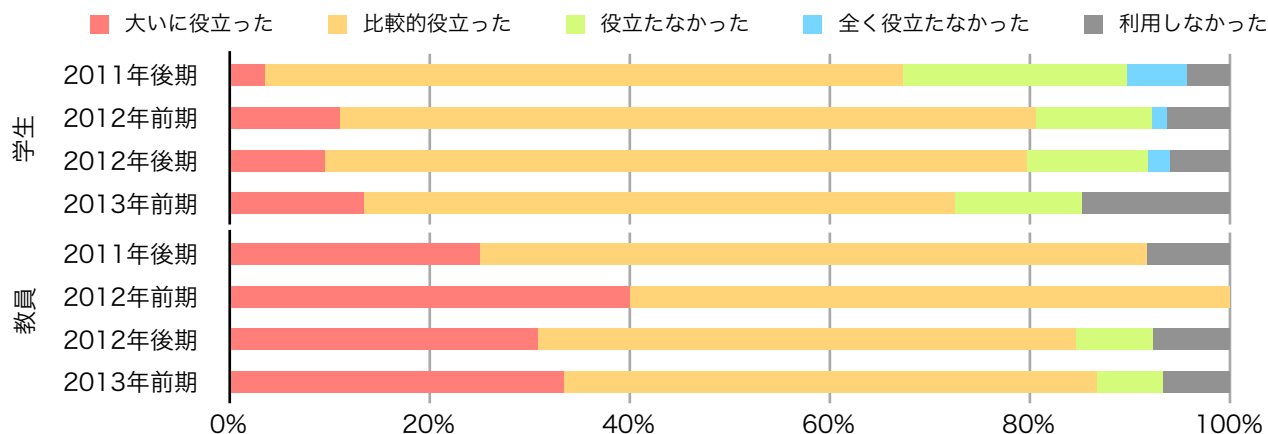


図-9: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)(教育学部)

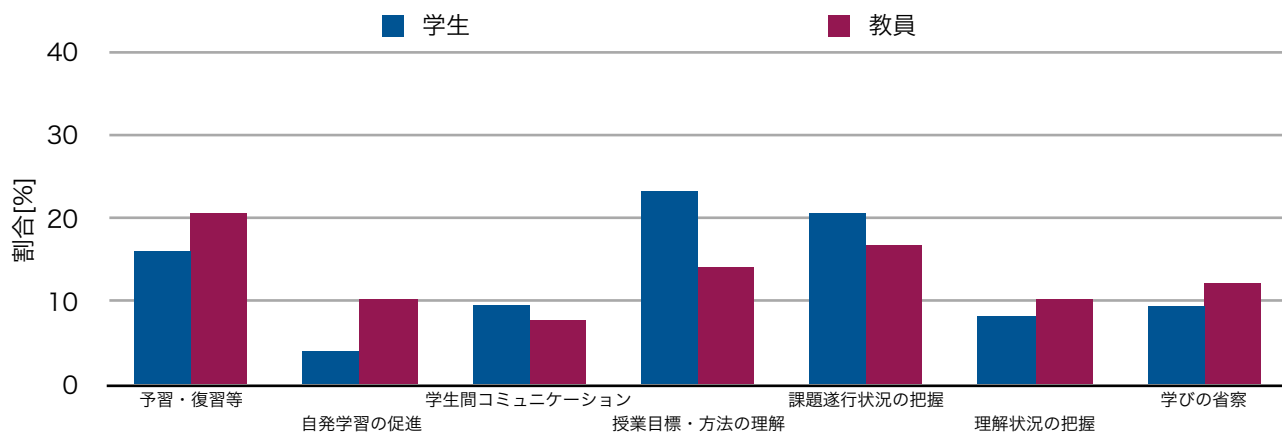


図-10: AIMSが効果的と感じた事項(教育学部)

した。ただし、2012年度以降はすべての学期において約1割の学生がAIMSを活用した授業を受講していないと回答しており、これがAIMSの満足度を下げている可能性が高くなっています。ゆえに、多くの授業でAIMSが活用されれば、学生の満足度も上昇するのではないかと推測されます。

分析3: AIMSが効果的と感じた事項

図-10から、AIMSを効果的と感じた項目について教育学部の学生の回答数の多い順に示すと、「授業目標・方法の理解」，「課題遂行状況の把握」，「予習・復習」の順であったことがわかりました。また、「学びの省察」について効果的と感じた学生の回答が他学部と比べると2倍ほど多くなりました。教員の場合は「予習・復習」，「課題遂行状況の把握」，「授業目標・方法の理解」の順に回答が多くなりました。その他の項目を見てみると、学生と教員とではその回答数は異なりますが、回答傾向はかなり似ています。これは教員が意図したAIMSの使い方の中で、学生に肯定的に受け入れられたものが効果的と感じた事項として挙っているため、このような傾向を示したと考えられます。

分析4: 役立ったと感じたAIMSの機能

図-11に示すように、役立ったと感じたAIMSの機能について、教育学部の学生の回答数は「課題提出」，「講義資料」，「連絡事項」の順に評価が高く、これらの項目は半数以上の学生が役立ったと感じています。学生の回答で教育学部のみに見られる傾向としては「掲示板」が役立った

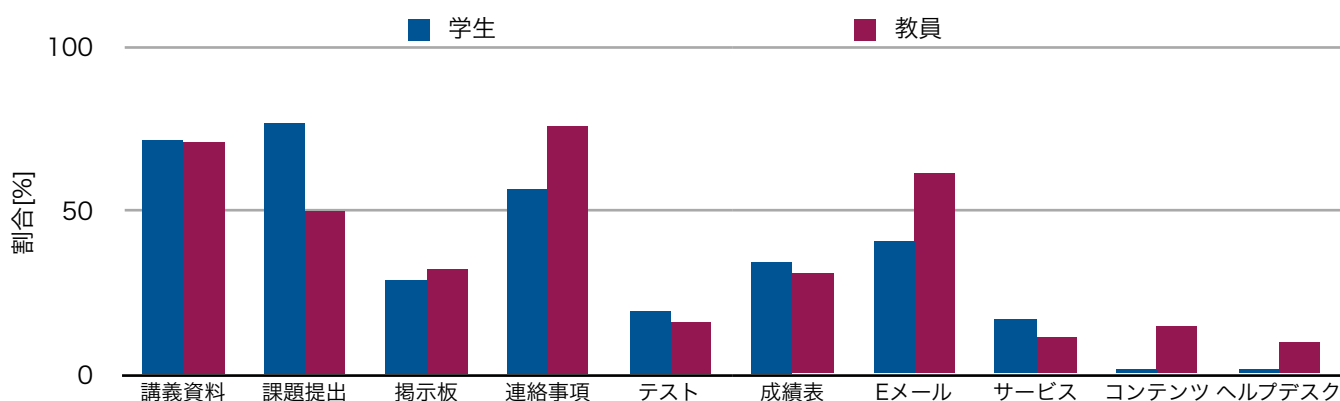


図-11: 役立ったと感じたAIMSの機能(教育学部)

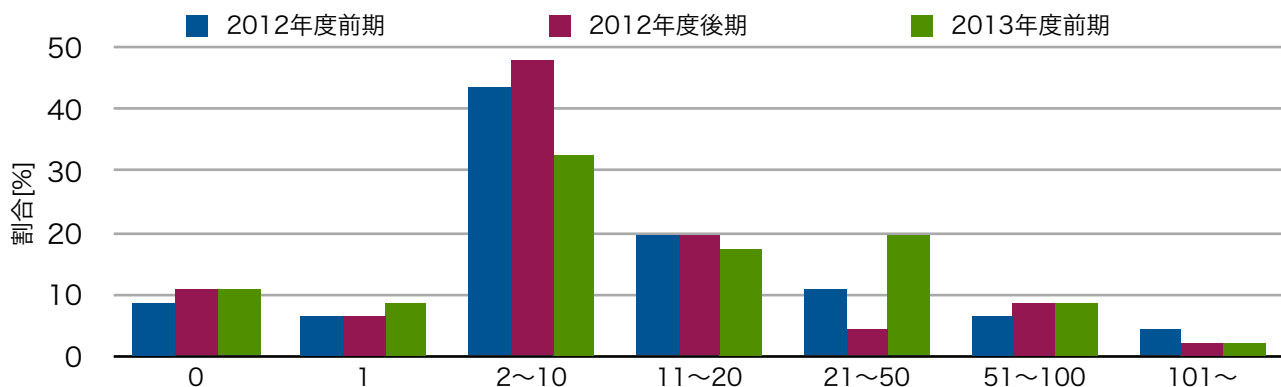


図-12: 学期ごとの教員のAIMSログイン数(地域科学部)

と回答した学生の割合が他学部のおよそ2倍であったという点です。教育学部では、掲示板はコミュニケーションツールとしてだけでなく、課題提出場所としても使われることがあり、それが要因だと考えられます。一方、教員は「連絡事項」、「講義資料」、「Eメール」、「課題提出」の順に回答数が多くなりました。この結果より、教育学部の大半の教員はAIMSを学生への連絡手段として使用していることが分かりました。

3.2 地域科学部

分析1: 学期ごとの教員のAIMSログイン回数

図-12に示すように、地域科学部では、2012年度前期および後期の「ログイン回数=2~10回」の比率は40%台でしたが、2013年度前期になると、32.6%に減少していることがわかりました。一方で、「ログイン回数=21~50回」の比率は、2012年度後期の4.4%から2013年度前期では19.6%に増加しています。このことは、成績提出などの限定的な利用から恒常的な活用へ転じる教員が増加したことによるものと考えられます。しかしながら、他学部では「ログイン回数=21~50回」の箇所に最大の回答者比率を有しているため、より一層、ログイン回数の多いユーザーを増やすことが必要といえるでしょう。このこととも関連しますが、ログイン回数が0回もしくは1回という教員の割合が3期ともに10%前後(計20%程)存在しているため、こうした教員層の利用を促すことが学部全体の利活用を進める上で重要になってくるといえます。

分析2: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)

図-13に示すように、地域科学部における学生の満足度は、約70%と、全学部を通じて最も低い値を示しています。これは、教員の満足度の低さ(例えば、2013年度前期は50%台)とも関係しています。両者にみられる特徴として、回答者の約1割が「利用しなかった」という回答を選択しています。すなわち、「利用しない」や満足度の低い教員が多いことが、AIMSの積極的な授業への活用を停滞させ、結果として、学生にもAIMSが学習・授業に役立ったと感じさせる機会(場面)を減少させているのです。また、学生の満足度と教員の満足度の相関に関しては、4期とも学生の満足度は60~80%の間にあるものの、教員の満足度が各期によって50~100%と幅のあることがわかります。これはアンケートの回答数が他学部に比べて少なく、回答者1人1人から受ける影響が大きいことに起因します。より実態に即した傾向分析を行うためにもアンケートへの回答者数を増やす必要があります。そのためにも、まずは教員のAIMS利用を促し、操作に慣れてもらうことで満足度を高め、アンケートにも関心をもってもらうことが重要です。

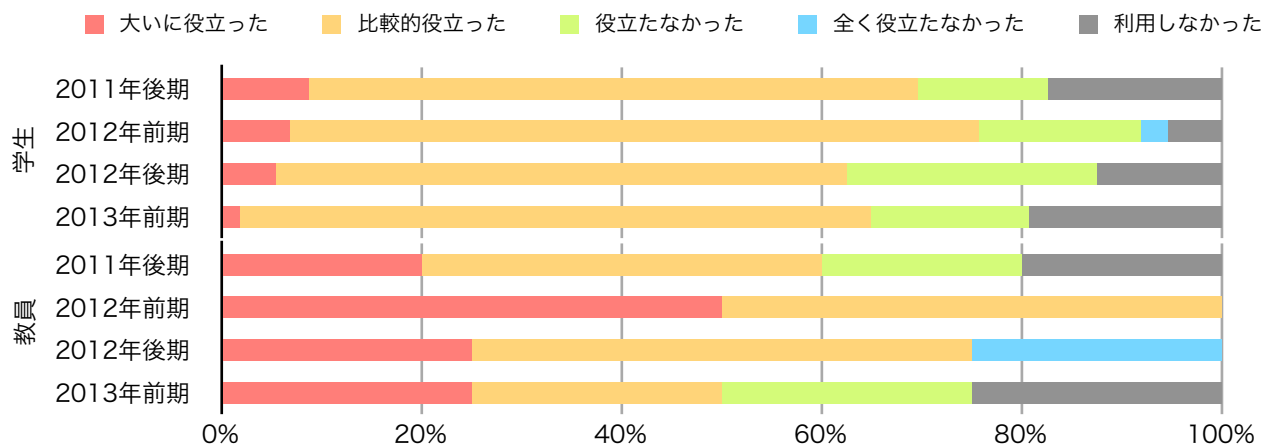


図-13: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)(地域科学部)

分析3: AIMSが効果的と感じた事項

図-14に示すように、学生がAIMSを効果的と感じた項目については、「授業内容や学習目標・学習方法の理解」および「課題遂行の状態・結果の把握」において高い値を示していることがわかります。また、「予習・復習等」の項目は理系学部を中心に相対的に高いのに対して、地域科学部では最も低い値を示しています。しかしながら、教員の回答をみると、「予習・復習等」の項目は最大の割合を示しています。このことは、教員は「予習・復習等」に効果的であると感じていますが、学生はそれほど効果的な状況になっていると感じていないということを示しています。一方で「学びの省察」の項目においては、学生は効果的と感じているのに対して、教員は全く効果を感じていません。すなわち、教員と学生の評価に乖離があるといえ、教員がAIMSを用いる際には一層の工夫や配慮が必要であることを示唆しています。また、地域科学部の場合、教員よりも学生は「学生間コミュニケーション」のツールとして評価する向きがみられます。こうした学生の視点に立った活用方策を考え、講義に反映させることも肝要です。

分析4: 役立ったと感じたAIMSの機能

図-15に示すように、役立ったと感じたAIMSの機能について、地域科学部の学生は「講義資料(の配布)」, 「課題提出」, 「連絡事項」, 「Eメール」, 「マイ成績表」の順に高い割合を示しています。ただし「課題提出」と「連絡事項」, 「マイ成績表」は、地域科学部内の項目の値か

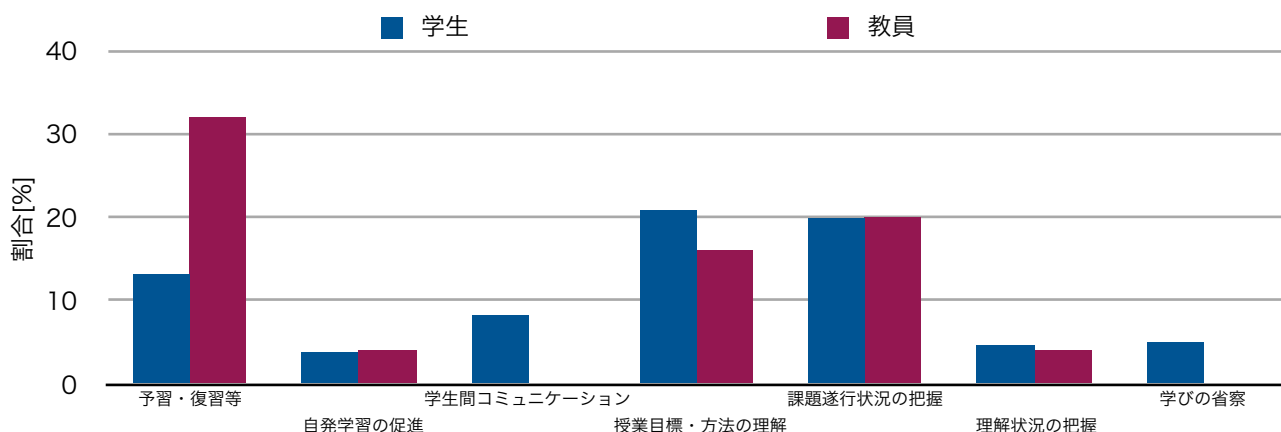


図-14: AIMSが効果的と感じた事項(地域科学部)

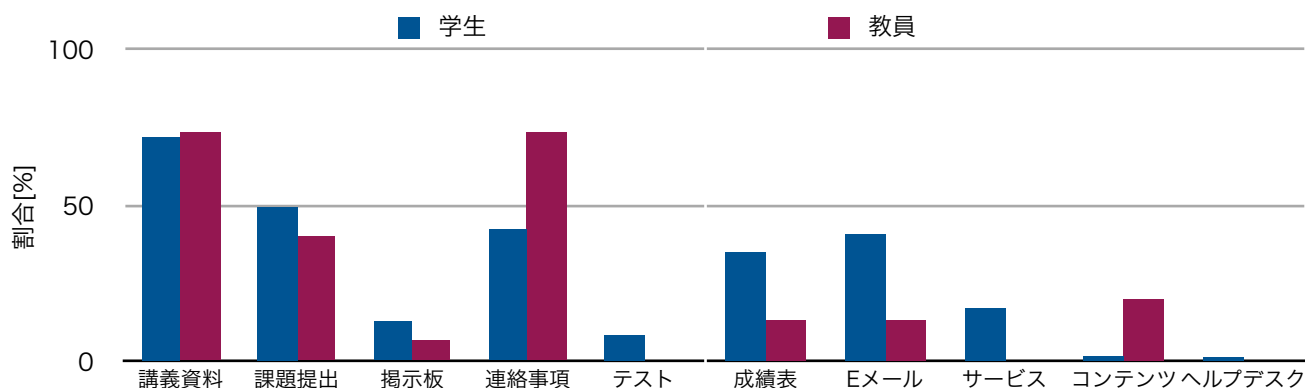


図-15: 役立ったと感じたAIMSの機能(地域科学部)

らみれば高いと言えますが、他学部と比べると依然として低く、50%を超える割合を示す項目は「講義資料」と「課題提出」機能のみです。

一方で教員の評価は、「講義資料」と「連絡事項」が同程度の高い割合を示しています。ただし、「連絡事項」については、教員の評価と学生の評価にズレがみられます。すなわち、教員側はAIMSを連絡ツールとして重視する傾向が強く、学生の方はそれほどまでに連絡機能を重視していません。また、「テスト」や「マイ成績表」、「Eメール」機能への評価が低い一方で、「コンテンツ(コンテンツコレクション)」の評価が高い点は特徴的です。その他にも「テスト」機能への評価の低さも目に付きます。これは、テストで単一解を求めることの困難な内容や問題を扱っている人文・社会科学系の講義科目が多いことも影響しています。ただし、教員側が「テスト」機能を活用する意志をもって、設問や回答方法を工夫することで、機能を有効に活用する可能性もあるといえ、そうした積極的な活用を促すための方策を考えることも必要です。

3.3 医学部(主に看護学科)

分析1: 学期ごとの教員のAIMSログイン回数

図-16に示すように、医学部看護学科では、2012年度にはログイン回数が0(全く利用しない)という教員が15~20%ありましたが、2013年度にはその割合が激減しました。その分、ログイン回数が2~10回、11~20回という教員の割合が増加しています。AIMSによる成績提出励行により、コースの管理を中心にログインの回数が増えたものと考えられます。しかし、教員の約半数がログイン20回以内であり、この割合は2012年度、2013年度と時期を経ても変わっていません。残りのログイン21回以上の定期的な利用(週1回以上)をする教員の数も変わっていないようです。

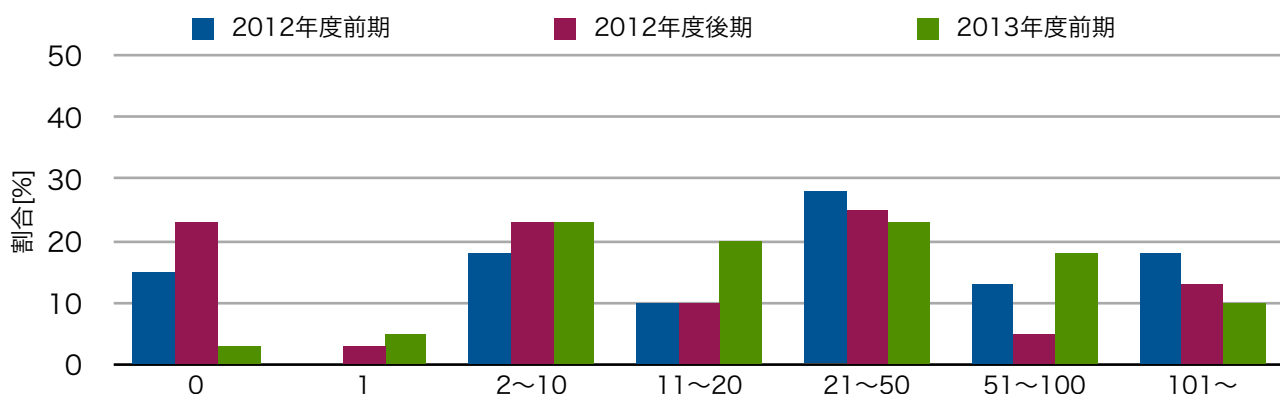


図-16: 学期ごとの教員のAIMSログイン数(医学部看護学科)

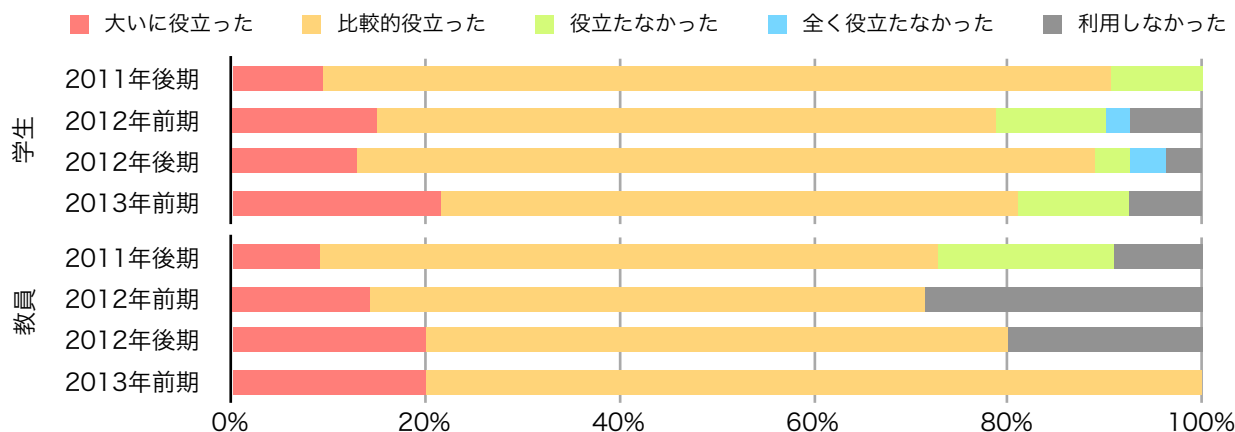


図-17: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)(医学部看護学科)

この21回以上ログインする教員のうち、21～50回利用群は減少し、51～100回利用群が増加しています。101回以上ログインのヘビーユーザーの割合は変わっていませんが、定期的に利用する教員ではその利用頻度が増していると思われます。この傾向は、全学的な傾向にほぼ一致しています。

分析2: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)

図-17に示されるように、アンケートに回答した教員の満足度は比較的高く、2013年度には100%が「少し」～「大いに」役立ったと回答しています。一方、学生の回答者の約8割が役立ったとしていて、特に2011年度と2012年度の後期には約9割の学生が役立ったと回答しています。後期開講のコースに役立つコースがあったものと推測されます。

分析3: AIMSが効果的と感じた事項

図-18に示すように、医学部看護学科の学生がAIMSを効果的と感じた項目としては、「予習・復習」、次いで「課題遂行の状態や結果の把握」、「授業内容や学習目標、学習方法の理解」でした。これらの項目には回答者のうち約2割の学生が効果的と感じていて、他の学部と同様でした。

教員が効果的と感じた項目も同じですが、「予習・復習」については効果的と感じる教員の割合は学生よりも低いものであり、2012年後期、2013年前期とその割合は更に低くなっています。AIMSに、予習・復習のツールとしての魅力が感じられなくなった看護の教員がいる可能性があります。

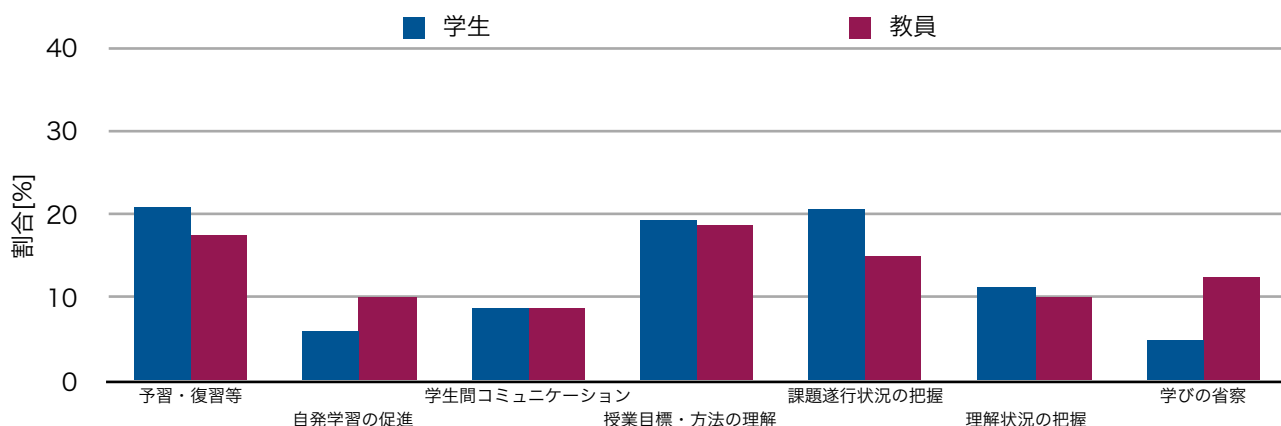


図-18: AIMSが効果的と感じた事項(医学部看護学科)

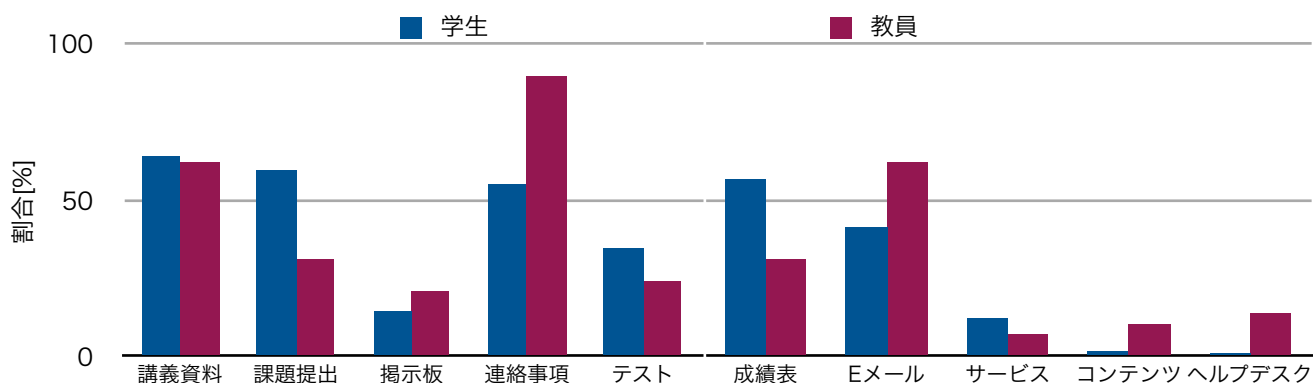


図-19: 役立ったと感じたAIMSの機能(医学部看護学科)

まず、また「学生相互のコミュニケーション」が機能として役立つとの回答がなくなりました。少人数演習において、AIMSにグループを設定しメンバー同士の情報交換を促していましたが、2013年度前期にせつかく同様の設定をしても、学生は専ら「LINE」で情報交換をされていて、前年度のような利用がされなくなってしまうためと考えられます。学科内にPCが少ない(各グループ1台)のため、各自の持つスマートフォン・LINEの利用にはかからないませんでした。今後はAIMSに掲げる資料・課題などとの連携が有用に感じられたり、またスマートフォンでのAIMSグループ機能の利用が有用に感じられたりすれば、効果的な利用形態になるものと考えられます。

分析4: 役立ったと感じたAIMSの機能

図-19に示すように、医学部看護学科の学生が効果的に役立ったと感じたAIMSの機能としては、「講義資料掲載」に次いで「課題提出」、「成績表」の割合が高くなっていました。特異的にはある学期において「テスト」が群を抜いて高い割合を示していました。コースにより必須事項となるこれら機能が重要であることは、ある意味当然であり、利用しない教員がいたとしても利用しない学生数は少ないものとなっています。その上でこれら機能について役立ったと挙げる学生は、役立つ以前に「当然」または「止むを得ず」として受け止めていると解釈できます。個々の学生が有用感を増すことも考えるべきで、そのためには「課題」を細かく提示し「成績表」で得手不得手を明示したり、「テスト」においてフィードバックを効果的に利用したりする方法も考えられます。

一方、教員が効果的に役立ったと感じたAIMSの機能としては、「連絡事項」、「Eメール」を挙げる教員が多く、学生への連絡手段としての役立っていることがわかります。

3.4 工学部

分析1: 学期ごとの教員のAIMSログイン回数

図-20に示すように、工学部において、2013度前学期内に一度もログインしない教員の割合は、2012年度に比べて減少しています。また、ログイン回数が2から20回の教員の割合も減少しています。それに対して、21回から50回、51回から100回の教員の割合が増加しています。以上のことから、成績提出などの限定された目的でAIMSを利用する教員が減少し、毎週1回～3回程度積極的に利用する教員が増加していると言えます。

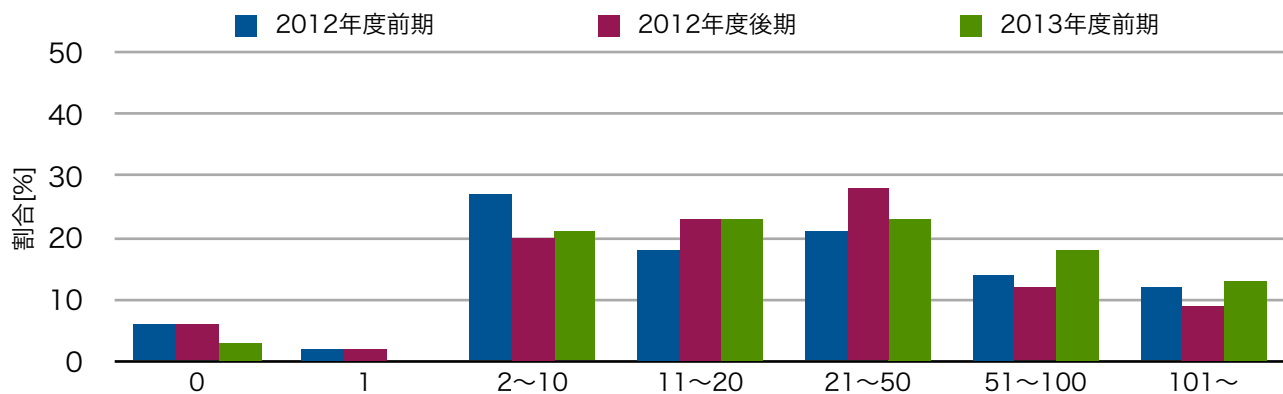


図-20: 学期ごとの教員のAIMSログイン数(工学部)

分析2: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)

図-21に示すように、2011年度後期から2013年度前期の4期のうち3期において、「学習・授業においてAIMSが役立った」と回答した工学部の教員の割合は学生の割合よりも高くなっています。このことから、教員が考えるほど学生はAIMSが役立ったと感じていないことが分かります。

分析3: AIMSが効果的と感じた事項

図-22より、工学部の学生がAIMSを効果的と感じた項目としては、「予習・復習等」、「授業目標・方法の理解」、「課題遂行状況の把握」があり、それぞれ20%程度の学生が効果的だと認識しています。これらの項目については教員も比較的高い評価をつけていますが、「課題遂行状況の把握」については学生の方がより効果的であると認識しています。これは、教員が課題を出すものの出しっぱなしであまり遂行状況をチェックしていないことが原因だと考えられます。「自発学習の促進」、「コミュニケーション」、「理解状況の把握」、「学びの反省」については教員、学生ともにそれほど効果的であると認識していません。それらの中でも「自発学習の促進」については教員の評価に比べて学生の評価が低くなっています。この原因として、教員が学生に期待するほど学生が自発学習に用いていない、すなわち課題が出されるとそれをこなすが、課題が出されない限りはAIMSを利用しない可能性が考えられます。

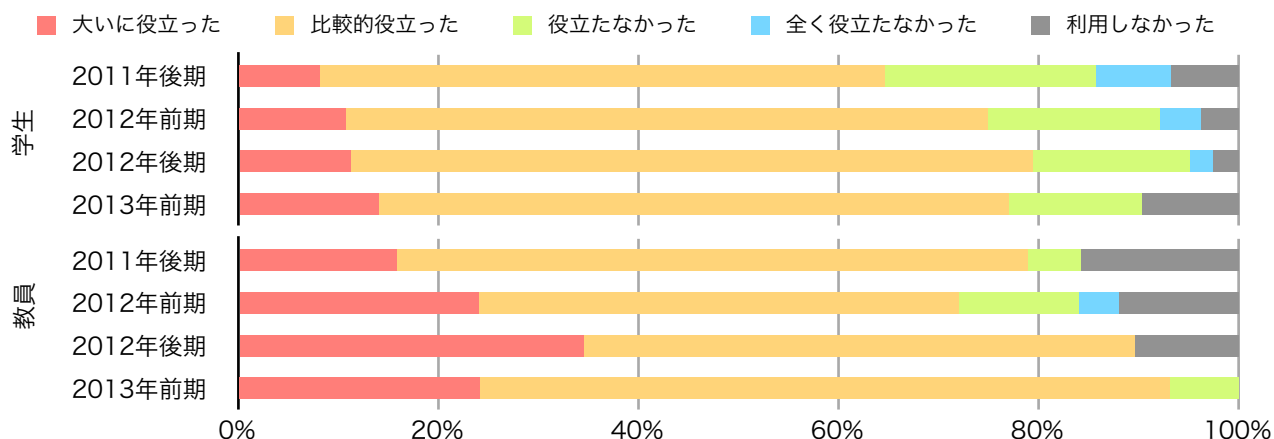


図-21: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)(工学部)

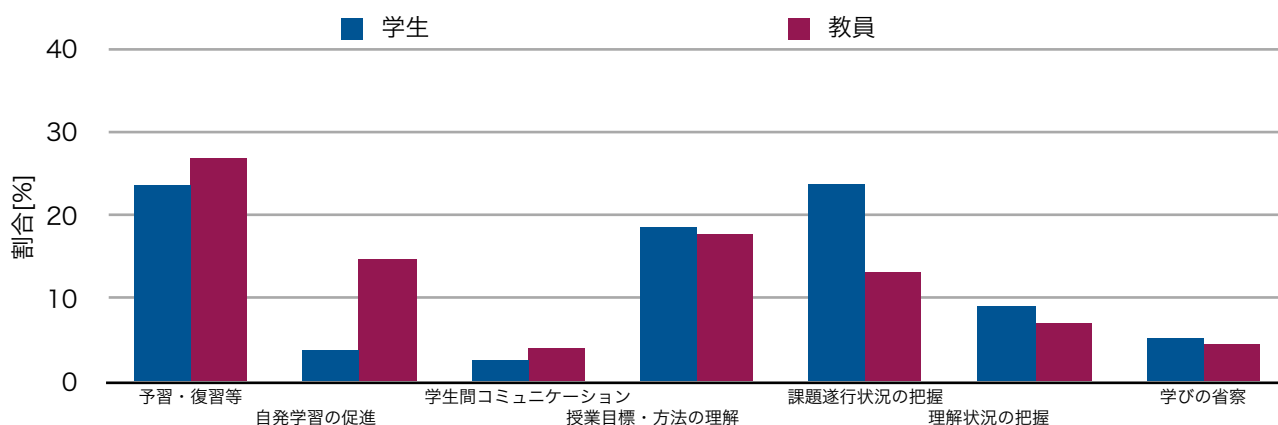


図-22: AIMSが効果的と感じた事項(工学部)

分析4: 役立ったと感じたAIMSの機能

図-23に示すように、「講義資料」については教員、学生ともに70%程度の回答者が役立ったと認識しています。「成績表」についても教員、学生ともに50%程度の回答者が役立ったと認識しており、教員と学生間で認識の相違はありません。

「課題提出」については、役立ったと認識している回答者の割合は教員の方が低くなっています。これは分析2で述べたのと同様、教員が課題を出すものの出しっぱなしであることを反映している可能性が考えられます。ただ、この質問が「提出課題のチェック」であれば教員の役立ち度認識は異なったものになったかもしれません。

「連絡事項」、「Eメール」については、役立ったと認識している回答者の割合は教員の方が高くなっています。いずれも教員は50%を超える回答者が役立ったと回答していますが、学生の回答者は50%を下回っています。これは、これまでの連絡手段である物理的な掲示に比べて、電子的な掲示、メールによる方法では連絡のためのコストが低いことが原因だと考えられます。一方で、学生にとっては、AIMSを経由して連絡事項を知ることは便利ではあるものの、物理的な掲示に比べて情報を知るためのコストがそれほど下がるわけではないので、役立ち度の認識につながらないものと考えられます。

「掲示板」、「テスト」、「サービス」、「コンテンツ」、「ヘルプデスク」について役立ったと認識している回答者の割合は教員、学生ともに低くなっています。これらの機能があまり使われていないからだと考えられます。

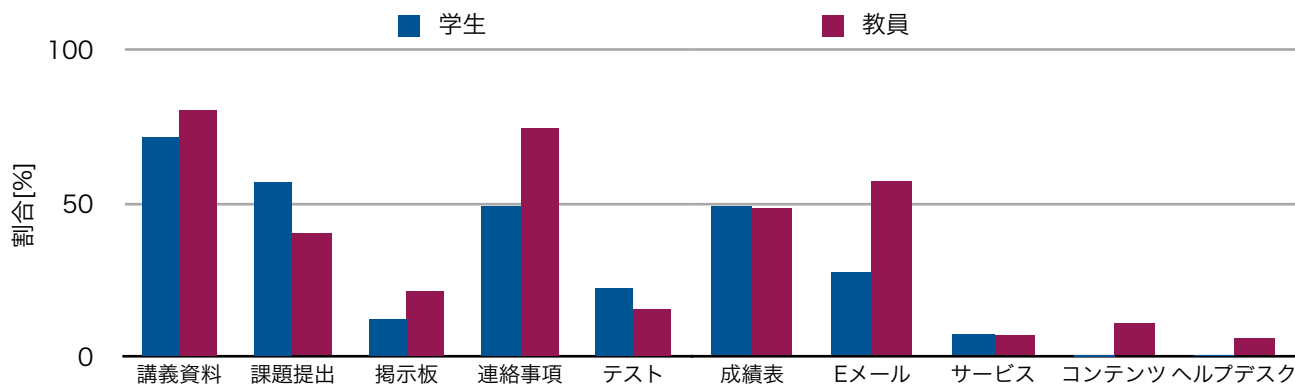


図-23: 役立ったと感じたAIMSの機能(工学部)

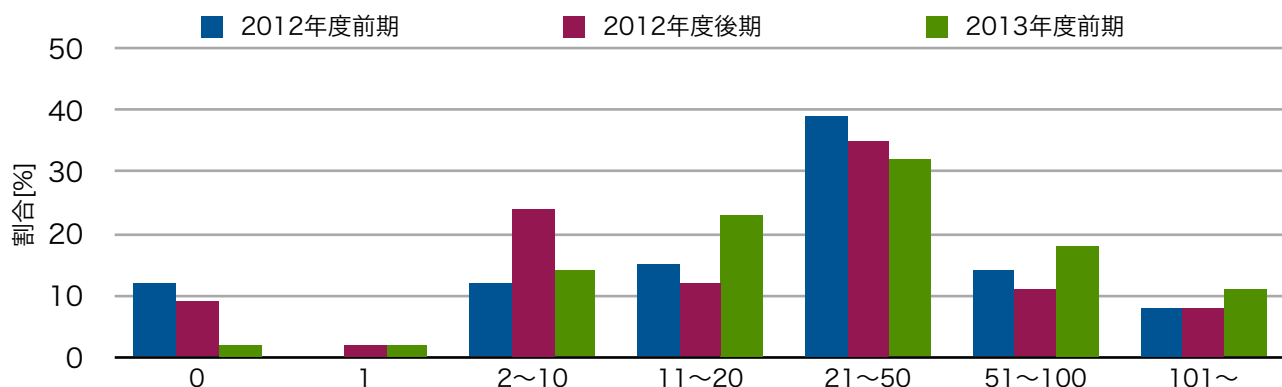


図-24: 学期ごとの教員のAIMSログイン数(応用生物科学部)

3.5 応用生物科学部

分析1: 学期ごとの教員のAIMSログイン回数

図-24に示すように、応用生物科学部では、学期ごとのログイン回数が21回以上、つまり平均して毎週2回以上AIMSにアクセスしている教員が半数以上を占めています。このように、AIMSを積極的に利用している教員の割合が他学部比べて高い傾向があります。一方、AIMSを全く利用していない教員の割合も2012年前学期には12%に上っていました。しかしこの問題は少しずつ改善され、2013年前学期にはほぼ解消されました。

分析2: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)

図-25より、応用生物科学部では、学生・教員ともに、他学部比べて高い満足度を示しています。満足していない学生・教員の中には「AIMSを利用した講義は受講しなかった」/「AIMSを利用しなかった」と答える人も多く、AIMSを利用さえすれば高い満足度を得られる可能性が示唆されます。

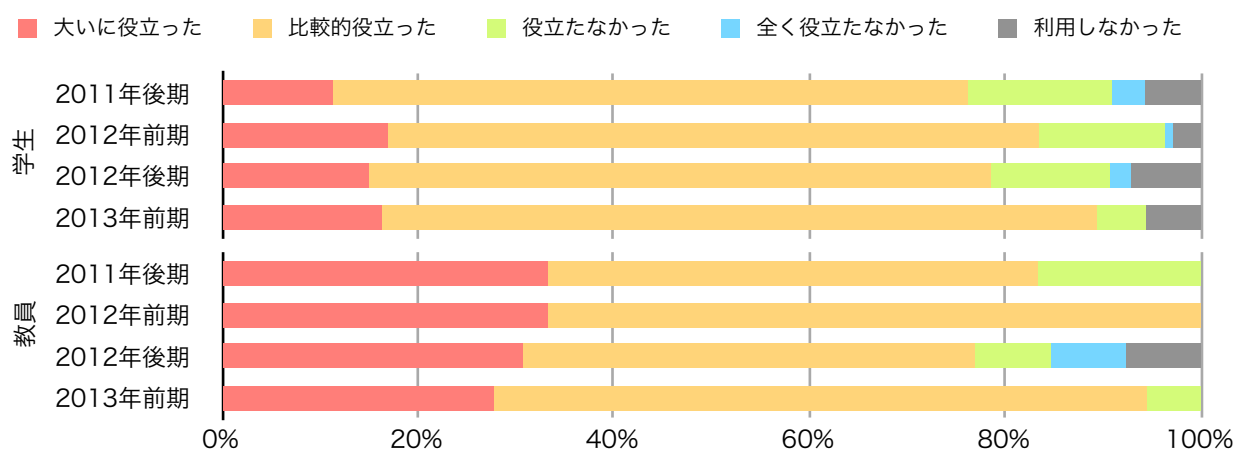


図-25: 学習・授業においてAIMSが役立ったか(AIMSの満足度)(応用生物科学部)

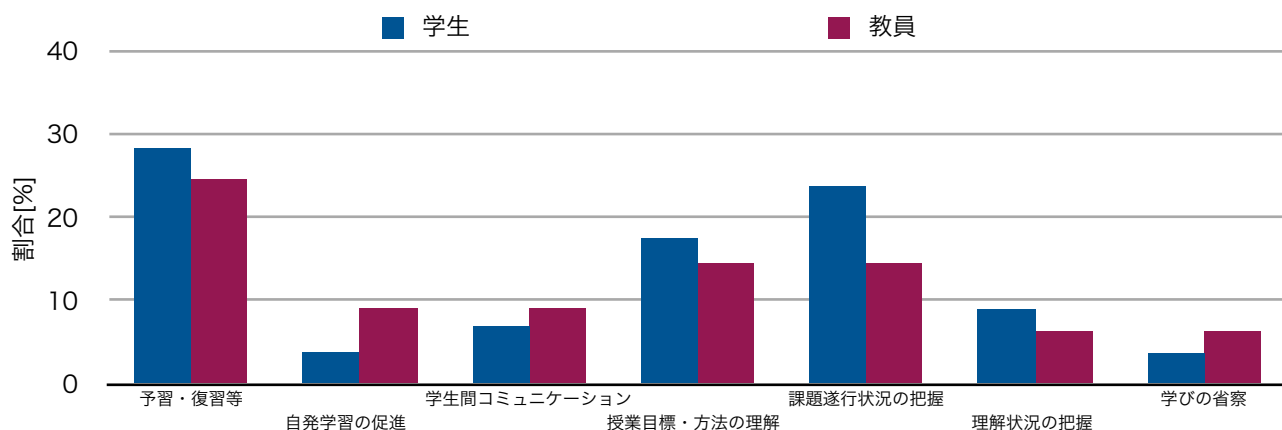


図-26: AIMSが効果的と感じた事項(応用生物科学部)

分析3: AIMSが効果的と感じた事項

図-26に示すように、応用生物科学部の学生がAIMSを効果的と感じた項目としては、「予習・復習等」が際立っています。その後に、「課題遂行状況の把握」，「授業目標・方法の理解」が続いています。教員の側でも、「予習・復習等」を挙げている人が最も多いですが、その割合は学生をやや下回っています。学生がAIMSを有効活用していると評価していた教員の中には、活用方法として「毎回の講義において予習・復習のポイントを示す」ことを挙げる人が多くなっていました。このように、AIMSが予習・復習の手助けとなり、授業全体を理解する道しるべとして威力を発揮する可能性がうかがわれます。その一方で、学生・教員ともに、「自発学習の促進」や「学びの省察」を挙げている割合が低く、この点での改善が望まれます。

分析4: 役立ったと感じたAIMSの機能

図-27に示すように、応用生物科学部の学生が役立ったと感じたAIMSの機能として挙げている項目の中では、「講義資料」，「連絡事項」，「課題提出」，「成績表」の順に割合が高く、いずれも50%を超えています。全体として、役立った機能として挙げている割合が他学部に比べて高めであり、応用生物科学部の学生が日常的にAIMSを利用し、様々な点でのメリットを感じていることがうかがわれます。一方、教員の側で高いのは「連絡事項」，「講義資料」，「Eメール」であり、特に「Eメール」と「連絡事項」は学生における割合をかなり上回っています。多くの教員にとっては、AIMSの第一義的な役割は学生への連絡手段であることがうかがえます。

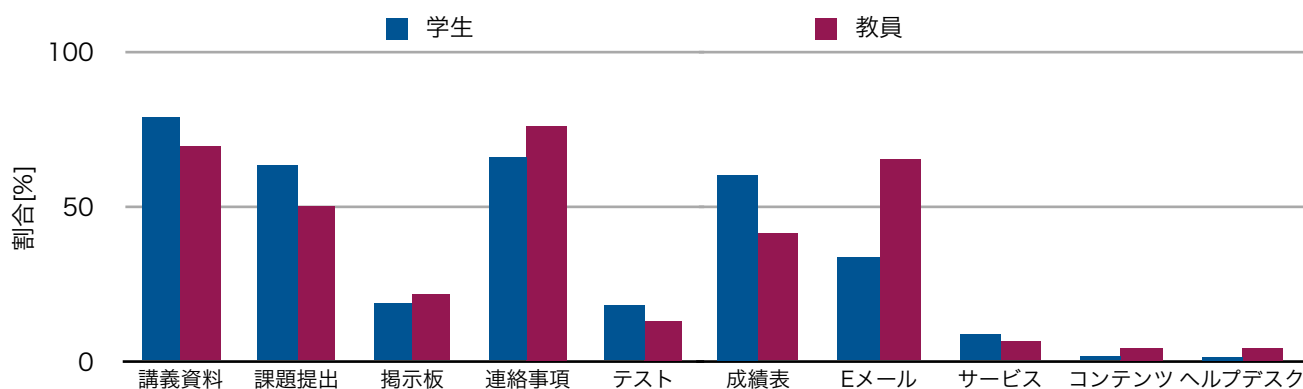


図-27: 役立ったと感じたAIMSの機能(応用生物科学部)

4. 授業改善への取り組みに向けた方向性

以上の分析および考察より、AIMSの利用状況については、全学的な傾向だけでなく、学部ごとの特徴があることがわかりました。とくに、AIMSを通じたテストや課題提出などを通じて、学生自らがその進捗状況や結果を確認できるようにするという学生側の要望が明確に現れる結果となりました。このことは、授業中だけでなく、自発的な自宅学習を促進することにも繋がり、学習効果を高めることにも寄与すると期待されます。ただし、このためには、テストや提出された課題の採点・コメント返却など、教員側の負荷を高めることにも繋がります。しかし、学生の学習意欲向上や習熟度向上が確実に図れるのであれば、検討の余地は十分にあるかもしれません。設問や回答方法を工夫することで、そうした負荷は軽減されることも可能と思われます。また、今回の分析で教員側の意識が高かった学生への連絡ツールや学生同士・学生教員間のコミュニケーションツールとしてAIMSを使うところから始めるのも一つの方法です。AIMSを使わなければならないと考えるのではなく、ご自身の授業設計の中で、より学習効果を高めることのできる機能を選択的に使っていくことで、授業改善が図られるものと期待されます。

学生へのAIMS利用アンケートでは、AIMSを効果的に活用していた授業名や教員名を回答してもらう設問もあります。その中で、毎年、各学部数名の先生方のお名前が挙げられており、そうした先生方の授業設計やAIMS活用法を知るのも極めて有用な情報になると思われます。そこで、本レポート末尾に掲載するようなAIMS活用事例FD意見交換会を企画いたしました。学生アンケートで挙げた各学部の先生方から、ご自身のAIMS活用状況を事例としてお話しいただくとともに、各学部コメンテーターの先生方を始め、全学の学生・教職員とともに意見を交換することにより、AIMSをどのように授業改善に活かすことができるかを議論する場としたいと考えています。

次年度からは、こうした分析レポートや活用事例FD意見交換会を通じた授業改善への取り組み結果とその後のAIMS利用状況への応答関係を分析することにより、本学における学習効果向上のためのAIMS活用モデルを提示していくことを計画しています。授業内容や学部によって、AIMSの活用方法は異なると考えられます。もちろん、AIMSを活用しない方が効果的な場合もあると思われます。こうしたいくつかのパターンを抽出し、各パターンにとって有効なAIMS活用方法をモデルとして示すことで、教員による授業設計に参考となる情報を提供していくことを次年度以降の方向性として位置づけていく予定です。

AIMS-Gifu活用事例FD意見交換会

主催

教育推進・学生支援機構

趣旨概要

AIMS-Gifuの利用ログデータおよび利用者アンケートによる活用状況分析結果に基づき、教員意識と学生意識の相違について簡単に紹介するとともに、アンケート調査において学生からAIMSを効果的に活用していると回答された各学部の教員からその活用事例を紹介してもらう。また、この活用事例紹介に基づき、紹介者とコメンテーターを中心としたパネルディスカッションを行い、授業改善への取り組みについて意見を交換する。

開催日時

2014年3月10日(月)13:00～14:45

開催場所

全学共通教育講義棟1C

プログラム

13:00～	開会挨拶	廣田則夫 (教学・附属学校担当理事)
13:05～	趣旨説明／学部別AIMS利用分析結果の紹介	篠田成郎 (AIMS-Gifu運用ワーキンググループ委員長)
13:10～	AIMS活用事例紹介	
	教育学部	野村幸弘 (教授／美術教育講座)
	地域科学部	洞澤 伸 (教授／地域文化学科)
	医学部	滝内隆子 (教授／看護学科)
		岡本千尋 (助教／看護学科)
	工学部	藤澤哲郎 (教授／化学・生命工学科)
	応用生物科学部	志水泰武 (教授／共同獣医学科)
14:00～	パネルディスカッション	
	パネラー	活用事例紹介者
	コメンテーター	小原光博 (准教授／教育学部技術教育講座)
		立石直子 (准教授／地域科学部地域政策学科)
		高橋由起子 (准教授／医学部看護学科)
		出村嘉史 (准教授／工学部社会基盤工学科)
		清水将文 (准教授／応用生物科学部生産環境科学課程)
14:40～	閉会挨拶	加藤直樹 (教育推進・学生支援機構副機構長)
14:45	閉会	
	全体司会進行	安田淳一郎 (准教授／教育推進・学生支援機構)